編集後記

『親鸞教学』第九五号をお届けします。

巻頭には延塚知道教授の「大乗の至極―往生浄土から大般涅槃道へ―」と題する論考を掲載しました。大学院生との学究生活をとおして、今「清沢満之に始まった方法論に立ち、近代教学の先輩達が尋ね当てた成果を踏まえて、『教行信証』をもう一度初めから、現生正定聚に立って難思議往生と大般涅槃道という二つの視点で読み直さなければならない状況にきている」と、真宗学の直面している課題を顕わしてくださいました。

西本祐攝助教の「石水期・清沢満之における「現生正定聚論」の究明(下)―清沢満之における現在安住の思想的背景―」は、本誌第九一号掲載の同題の論稿(上)に続く後半の論考です。「在床懺悔録」における「現生正定聚論」の究明の「上」に続いて、本稿では「他力門哲学骸骨試稿」に展開される「現生正定聚論」を考察されています。

本学元特別研修員の瓏　弘信氏には「「善信」実名説を問う」と題する論文を寄稿していただきました。本誌第七五・七六号に掲載の論考から現在に至るまでの諸氏の研究発表を踏まえての論考です。「上」、「下」の二回に分けて掲載します。

任期制助教の青木　玲氏からは「本願の正機―「唯除」の文を通して―」を寄せていただきました。「親鸞における「唯除」の文とは、本願の正機としてある自己を明らかにするものである」ことを考察されています。

以上の論文に加えて、金子大榮先生の講義録「教行信証の諸問題」と安田理深先生の講義「入出二門の源泉」の筆録を掲載しました。

かつて、物事の判断基準を「誰が正しいか」ではなく「何が正しいのか」と考えるようになったことが自己変革の始まりだった、という相馬雪香氏の論考（親鸞仏教センター発行『アンジャリ』第十二号掲載）に触れて、深く感銘し、それ以来何かにつけてこの言葉を思い起こします。現代社会の諸々の問題の底に通ずる言葉であるように感じます。

「誰が正しいか」が判断基準になれば、とかく利己的になりがちで、相手の悪いところを捜してしまいます。「何が正しいのか」がわからなくなります。にもかかわらず、私（たち）の日常は「何が正しいのか」ではなく、「誰が正しいか」を判断基準にしてしまう危うさを抱えています。

「何が正しいのか」を判断基準にするという意味は、我がはからいで「何が正しいのか」を判断するということではないと思います。「何が正しいのか」という問いに対し、自らのはからいによるモノサシで短絡的に利己的に答えを出そうとするならば、それは「何が正しいのか」ではなく、「何を正しいことにするのか」に腐心して、自己正当化に陥っているのにすぎなくなるのではないでしょうか。真実は真実のはたらきによって、人をとおして人のうえに回向されるものだと思います。この言葉は、わが身の聞法・求道における「人」と「法」に対する姿勢を常に問いかけてきます。

（文責　谷）